

2021. 5. 9 (日) マタイ24:36~44

24:36 ただし、その日、その時がいつなのかは、だれも知りません。天の御使いたちも子も知りません。ただ父だけが知っておられます。

24:37 人の子の到来はノアの日と同じように実現するのです。

24:38 洪水前の日々にはノアが箱舟に入るその日まで、人々は食べたり飲んだり、めとったり嫁いだりしていました。

24:39 洪水が来て、すべての人をさらってしまうまで、彼らには分かりませんでした。人の子の到来もそのように実現するのです。

24:40 そのとき、男が二人畑にいると一人は取られ、一人は残されます。

24:41 女が二人臼をひいていると一人は取られ、一人は残されます。

24:42 ですから、目を覚ましていなさい。あなたがたの主が来られるのがいつの日なのか、あなたがたは知らないのですから。

<説教>

「いちじくの木の花が柔らかくなって葉が出てくると確実に夏の近いことをあなたがたが知るのと同じように、わたしがあなたがたに話したしるしのすべてを見たら、確実にわたしの到来と世の終わりが近いことをあなたがたは知りなさい。」と主イエス・キリストは弟子たちに言われました (32,33)。

主イエスは「決して消え去ることがない」ご自身のみことば(35)によって、ご自身の(再度の)到来と、それによって世が終わる時のしるしについて弟子たちにお教えになりました。

「決して消え去ることがない」主イエスの再度の到来(再臨)と主のみことばによって、天地は消え去り、この時代も過ぎ去る(消え去る)のです。

そして主のみことばによって新しい天と新しい地に再創造されるのです。

このように、「あなたが来られ、世が終わる時のしるしは、どのようなものですか。」(3)という弟子たちの質問に対して主イエスはこれまでお答えになって来ました。

そして、弟子たちが同じくした質問である「いつ、そのようなことが起こるのですか。」(3)に対して本日の箇所(24:36-44)でお答えになり、更には「ですから、目を覚ましていなさい。」とお命じになられます。

24:36 ただし、その日、その時がいつなのかは、だれも知りません。天の御使いたちも子も知りません。ただ父だけが知っておられます。

〈その日、その時〉は必ず来ます。

しかし、それが〈いつなのかは、だれも知りません。天の御使いたちも子も知りません。ただ父だけが知っておられます。〉

〈子〉即ち神の御子であるご自身も〈知りません〉とイエスが言われるのはどういうことなのでしょう。

一つには、イエスが「神としてのあり方を捨て…人間と同じようになられ…自らを低く」

(ピリピ 2:6-8) なさったが故に、人間としての限界に甘んじられた、人間の側に身を置いてくださったということです。

「わたしも知らない。故にあなたがたも知らなくてよいのだ。知らなくても何の心配もないのだ」ということです。

もう一つは、「あなたがたが知らないでいることがわたしの父のみこころなのだ。わたしは子として父のみこころに従う故にあなたがたに教えることをしない。そのつもりは全くない」ということです。

「知る」とは単なる知識というよりむしろそれ以上の関心とか興味とか更には愛までを意味する言葉です。

ですから、「あなたがたが知りたがって尋ねた意味で『その日、その時がいつなのか』ということにわたしは興味も関心もない。よって教える気もない」、「『その日、その時がいつなのか』を問い、知ることはあなたがたにとっては余計なことだ」ということです。

それよりも、ただ「目を覚ましていなさい」(42)、「用心(用意)していなさい」(44)とイエスはお命じになりました。

「わたしが話した〈しるし〉を含めて、十分に〈前もって話し〉た〈わたしのことば〉を信じなさい。大いに、否最高の興味と関心と愛をもってわたしと〈わたしのことば〉に目を留めなさい。『いつなのか』と不安になって不平を言うのでなく、必ず〈実現する〉と最後までわたしとわたしのみことばに立ち続けなさい。耐え忍びなさい」そうイエスは弟子たちにお命じになったのです。

〈人の子の到来はノアの日と同じように実現する〉(37)からです。

〈ノアの日〉即ち〈洪水が来て、すべての人をさらってしまう〉(39)その日まで〈彼らには分かりませんでした〉つまり彼らは知りませんでした。

何故彼らは知らなかったのかと言えば、それは彼らが神を知らなかったからです。

ノアにお語りになり、ノアが信頼し、ノアを通して十分に彼らにお語りになった神に対する興味も関心も愛もなかったからです。

彼らにとっては〈世の終わる時のしるし〉だった〈箱舟が造られていた間、神が忍耐して待っておられた〉(Iペテロ 3:20)のに、彼らはノアを通して聞いた神のことば、警告を最後まで無視して信じませんでした。

〈洪水前の日々にはノアが箱舟に入るその日まで、人々は食べたり飲んだり、めとったり嫁いだりしていました。〉(38)

〈食べたり飲んだり、めとったり嫁いだり〉とありますが、これは創世記6章によっても明らかに神無しで、神抜きで、神のみこころを無視して、神に従わないで、人間中心に人間の肉の欲望に従ってめちゃくちゃに生きていたことを表しています。

彼らはノアの言葉と行いによって神からの警告を長い間受けていたにもかかわらず、それらは無視し、あざ笑い、神を知ろうともせず、すっかり安心してひたすら気楽に過ごしていたのです。

ノアを通して充分にお語りになった神と神のことばを、「そんなこと信じない、起こるわけない、ばかなこと言ってるんじゃないよ」等と最後まで侮り嘲り無視して信じなかった、神に立ち返らなかつた(悔い改めなかつた)彼らの上に〈洪水が来て、すべての人をさらって〉しまいました。

その時になってやっと分かった（知った）としても、彼らにはもう手遅れでした。

〈人の子の到来もそのように実現するのです。〉

〈そのとき、男が二人畑にいと一人は取られ、一人は残されます。女が二人臼をひいていると一人は取られ、一人は残されます。〉(40,41)とイエスは言われます。

そのとき「二人一緒の仕事」に代表されるような、人間的な仲間、繋がり、関係は全く問題になりません。

私たち人間〈一人〉〈一人〉は〈人の子の到来〉の〈その日、その時がいつなのか〉を誰も〈知らない〉、知らなくてよい、知る必要はありません。

しかし、〈人の子の到来〉の〈その日、その時〉に〈一人〉〈一人〉がイエスを信じていて、決して消え去ることがないイエスのみことばに信頼して生きている必要が絶対にあるのです。

〈人の子の到来〉の〈その日、その時〉には、〈一人〉〈一人〉の仕事、または夫婦、家族、親族、地域、学校などの人間的な関係が問題なのではなく、〈一人〉〈一人〉がイエスに繋がっているか否かが決定的に重要なこととなるのです。

〈ですから、目を覚ましていなさい。あなたがたの主が来られるのがいつの日なのか、あなたがたは知らないのですから。〉(42)とイエスは言われるのです。

私たち〈一人〉〈一人〉が〈目を覚まして〉いることがとにかく大事なのです。この〈目を覚ましている〉ことの大切さについて、イエスはある〈家の主人〉の〈夜〉の行動にたとえてお教えになりました。

〈次のことは知っておきなさい。泥棒が夜の何時に来るかを知っていたら、家の主人は目を覚ましているでしょうし、自分の家に穴を開けられることはないでしょう。〉(43)

このたとえの場合は〈泥棒が夜の何時に来るかを知っていたら〉と言われているので、ちょっと混乱してしまいそうですが、ここでの大事なポイントは〈目を覚ましている〉必要を強調することでしょう。

〈泥棒が夜の何時に来るかを知〉りながら眠りこけて何の対策もせず、むざむざと〈自分の家に穴を開けられ〉て自分の大事な持ち物を盗まれるようなばかなことは誰もしません。

自分の持ち物に損害と危険が迫っていると知っているならたとえ夜中の眠いときでも必ず〈目を覚まして〉警戒するのはこの世の誰でもすることです。

ましてやイエスとイエスのみことばを信じ、イエスと繋がることへと召された弟子たちが、自分たちの〈主が来られるのがいつの日なのか…知らない〉けれども、来られることは確実であり、〈思いがけない時に来る〉ことは知らされているのだから、〈目を覚まして〉〈用心してい〉ることは当然であり、それだけができること、なすべきことなのです。

〈ですから、あなたがたも用心していなさい。人の子は思いがけない時に来るのです。〉(44)とイエスは改めて、重ねて、念を押すように言われるのです。

さて〈目を覚ましていなさい〉(42)とは、〈用心（用意）していなさい〉(44)ということですから、主が〈思いがけない時に来〉てもいいように備えなさいということではありません。

では私たちがなすべきそんな備えとは更にどういうことでしょうか。

使徒パウロは後に I テサロニケ 5:1-8 で次のように言っています。

「兄弟たち。その時と時期については、あなたがたに書き送る必要はありません。主の日は、盗人が夜やって来るように来ることを、あなたがた自身よく知っているからです。人々が『平和だ、安全だ』と言っているとき、妊婦に産みの苦しみが臨むように、突然の破滅が彼らを襲います。それを逃れることは決してできません。しかし、兄弟たち。あなたがたは暗闇の中にいないので、その日が盗人のようにあなたがたを襲うことはありません。あなたがたはみな、光の子ども、昼の子どもなのです。私たちは夜の者、闇の者ではありません。ですから、ほかの者たちのように眠っていないで、目を覚まし、身を慎んでいましょう。眠る者は夜眠り、酔う者は夜酔うのです。しかし、私たちは昼の者なので、信仰と愛の胸当てを着け、救いの望みというかぶとをかぶり、身を慎んでいましょう。」

(I テサロニケ 5:1-8)

洪水前の日々、人々が〈『平和だ、安全だ』と言っているとき〉、洪水が来て〈突然の破滅が彼らを襲〉ったのでした。

ですから、〈思いがけない時〉の〈人の子の到来〉に〈用心して〉〈目を覚まして〉いるとは、〈暗闇の中にいない〉者、〈夜の者、闇の者〉ではない者、〈光の子ども、昼の子ども〉として生きることだと私たちは知るのです。

私たちは〈昼の者なので、信仰と愛の胸当てを着け、救いの望みというかぶとをかぶり、身を慎んで〉生きるのです。

それは〈その日、その時がいつなのか〉知らされない不安や不満の思いをもってではありません。

また、刑罰の判決を受ける被告人のようなびくびくした思いをもってでもありません。

私たちは〈人の子の到来〉、私たちの〈主が来られる〉ことが確かだと知らされているので、キリスト故の苦難の中にあっても、反キリストとの戦いの大きな苦難の中にあっても、不法がはびこり多くの人の愛が冷えても、ますます主を信じて愛し、主が来られることに関心を持ち、良い意味で興味を持って、感謝と喜びをもって主にだけ救いの望みを置いて最後まで忍耐して歩み続けるのです。

そのようにして御国の福音を宣べ伝え、証して、必ず再び来られる主のみもとに迎え入れていただくのです。